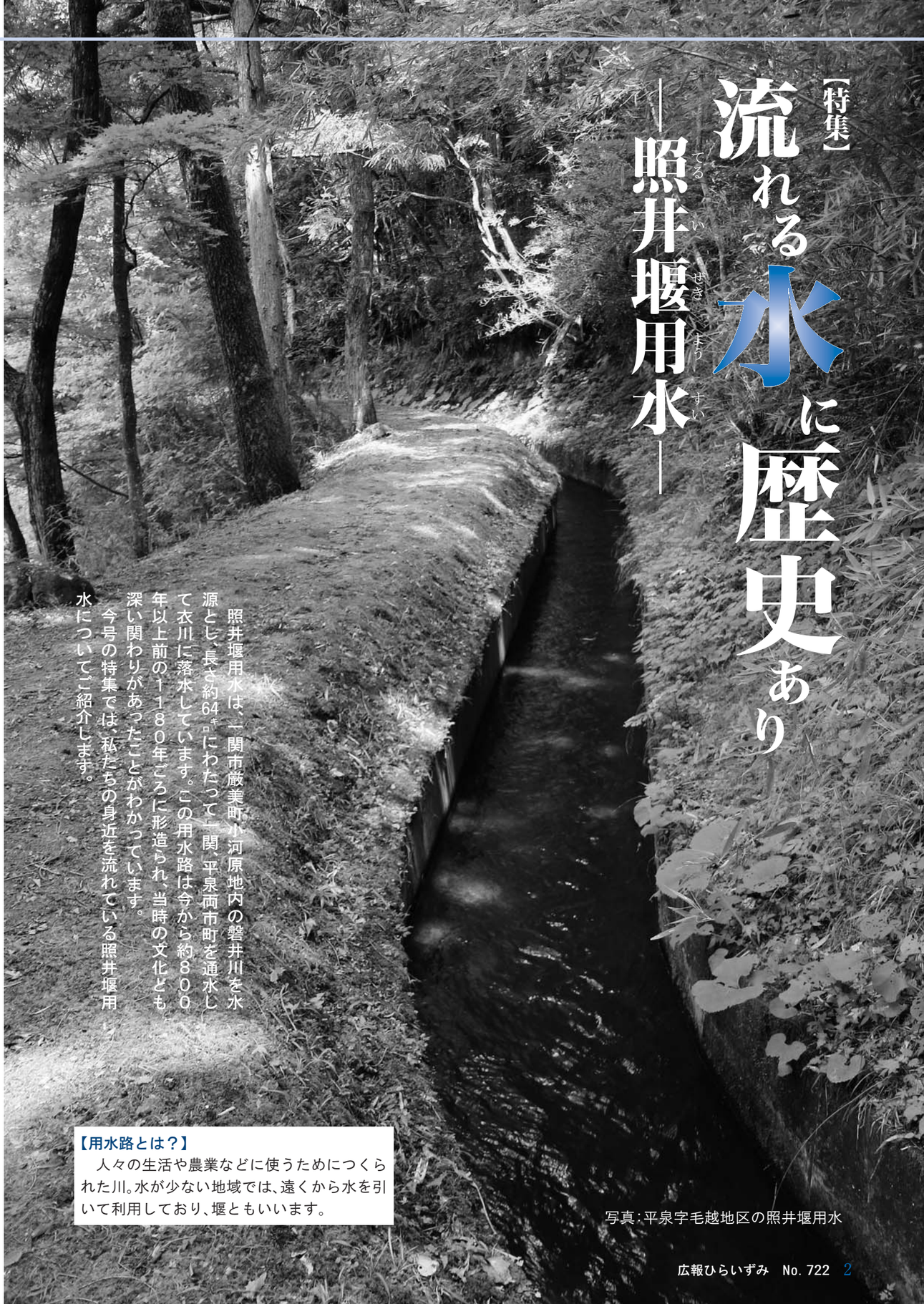
【特集】流れる水に歴史あり
―照井堰用水―



照井堰用水は、一関市厳美町小河原地内の磐井川を水源とし、長さ約64キロにわたって一関、平泉両市町を通水して衣川に落水しています。この用水路は今から約800年以上前の1180年ごろに形造られ、当時の文化とも深い関わりがあったことがわかっています。

今号の特集では、私たちの身近を流れている照井堰用水についてご紹介します。

【用水路とは？】

人々の生活や農業などに使うためにつくられた川。水が少ない地域では、遠くから水を引いて利用しており、堰ともいいます。

写真：平泉字毛越地区の照井堰用水

第1章 開削を重ねてきた歴史

私たちの身近に流れている照井堰用水。豊富な水量を誇るこれは自然の川ではなく、安定的な水源を求めて、人の手によってつくられた用水路です。

なぜ照井堰用水がつくられたのか。そこには地域を豊かにするため、幾多の先人たちが開削を重ねてきた歴史がありました―。

寺院から発展した用水路

平泉町には、世界文化遺産の構成資産である中尊寺と毛越寺、現在は遺跡化した無量光院跡、観自在王院跡という12世紀に造られた4寺院が存在しますが、それぞれに大きな池を伴っています。そして発掘調査により、それらの池に水を満たすための導水路が発見されており、それが現在の照井堰用水の始まりと考えられています。

ＶＲで再現された800年前の無量光院

特にも無量光院跡への水路は、一部しか見つかっていませんが平安時代には例のない長い水路であったことが予測されます。そのため照井堰用水は、無量光院の建立時期である１１８０年ごろに庭園への導水路から多面的機能を持った地域を潤す用水路へと変化し、発展していったものと推定されています。

知ってる？豆知識①

照井太郎高春（てるいたろうたかはる）

藤原秀衡の家臣で、照井堰用水生みの親とされる。現在でいえば建設大臣。毎年５月３日に開催される「春の藤原まつり」源義経公東下り行列にも出演しています。

行列に出演する照井太郎高春役

照井太郎高春伝説

平安時代末期（12世紀）、東北の都と称されたみちのく平泉では、藤原氏の時代になってから人口が10万人に増え、京都や奈良にも並ぶほどの大都市となっていました。このため多くの食料が必要となった平泉、一関地方ではたくさんの水田が開墾されました。しかし農民たちは深刻な水不足で悩んでいました。このとき水不足や貧困に苦しむ農民たちを救うために立ち上がったのが、藤原秀衡の家臣だった照井太郎高春でした。

高春は、水の豊富な磐井川から水を引こうと考え、川を丹念に調べて歩き、堰の道筋を決めるために夜に提灯を並べて土地の高さを測ったり、ぬかるんだ土地には板を並べて印を付けたり、お椀に水を入れて土地の傾きなども調べました。そして磐井川上流にある今の厳美町小河原地内から水を引き水路をつくることを決意。水の取り入れ口となる川の岸の土手は固い岩だったため、岩を砕く工事は１日に１～２メートルしか進まず、時には大きな岩の下敷きになり亡くなった人もいたといいます。

高春は志半ばにして藤原氏滅亡とともに亡くなりますが、その下流の水路を高春の子孫と多くの人たちの働きにより、長い年月をかけて完成させました。

「照井堰用水」位置図

高春の墓と伝えられる「五輪塔」（一関市中里）

古くに開削されたトンネル内部

この水路のおかげで五串村、赤荻村、山目村、中里村などの各水田に水が引かれるようになり、やがて人々はその水路を「照井堰」と呼ぶようになりました。そして約８００年以上経過した現在も照井堰用水として、地域を潤す大切な「水」が流れています。

豊かな水が流れる照井堰用水